JAPRS

JAN .2011 No.1

新春号

社団法人　日本音楽スタジオ協会

目　次

会長年頭挨拶 1

平成22年度通常総会＆懇親会レポート 2

技術セミナーレポート 4

第11回JAPRS新プロ・エンジニア養成セミナーレポート 6

2010年JAPRS企業説明会レポート 7

第9回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告 9

最新のBlu-ray&DVDオーディオ・コーデック技術勉強会レポート 10

第7回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告 13

ラウドネスメータ勉強会レポート 14

2010年JAPRS大阪地区Pro Toolsセミナーレポート 16

第17回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート 18

第17回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評 27

「音の日のつどいパーティ」レポート 37

会員動向 39

会長年頭挨拶

(社) 日本音楽スタジオ協会
会 長　内 沼　映 二

新年明けましておめでとうございます。
日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返りますと、２年前に発生した米国の金融破綻の影響がEU圏まで拡大したことに始まり、沖縄基地・領土問題・データ流出・朝鮮半島の緊迫化・TPP問題等々、政治の不安定な背景を含め、混迷の度が更に深まった一年と言えるのではないでしょうか。

さて、JAPRSは社団法人として本年21周年という新たなスタートの年を迎えることとなります。
この間の音楽業界を取り囲む様々な制作環境への対応を始め、JAPRSを支え続けていただいている会員の皆様および関連する各位に対し、心より感謝申し上げます。

また、平成25年11月を期限とする公益法人制度改革に関しましては、スタジオ業界の将来の在り方を十分検討し、現組織の見直しを含め、最重要な課題と認識して努力する所存です。

会員の皆様をはじめ、関係各位のご支援・ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

平成22年度通常総会＆懇親会レポート

＜通常総会＞

５月18日（火）、JAPRSは港区元赤坂の明治記念館１Ｆ「竹・梅の間」において、平成22年度通常総会を開催し、平成21年度の事業報告書（案）決算報告書（案）、平成22年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）並びに役員全員任期満了による新役員の選出について正会員に諮り、全ての議案が異議なく全員一致で承認された。

はじめに、佐藤事務局長が定足数の確認を行い、委任状を含む41名の出席数を確認（定足数）、総会の開会を宣言した。

総 会

続いて内沼会長が議長に当たり、議事録署名人として専務理事の清水 三義 氏、常任理事 広岡 淳利 氏の両名が選出された。

次に石野副会長より第１号議案「平成21年度事業報告書（案）」及び佐藤事務局長より「収支決算報告書（案）」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認された。

続いて石野副会長より第２号議案「平成22年度事業計画書（案）」及び佐藤事務局長より「収支予算書（案）」について説明が行われ、審議の結果、第１号議案と同様に全員一致で承認された。

続いて議長より第３号議案「役員全員任期満了による新役員の選出」について経過が説明され、同様に全員一致で承認された後、議長である内沼会長が閉会を宣し解散した。

＜懇親会＞

通常総会終了後、18：30より明治記念館１Ｆ「曙Ｉの間」において、正会員、賛助会員及び招待者を含む92名が集い、懇親会が開催された。

内沼 映二 会長

司会進行は総務委員会の佐々木委員長（アザブ・オー・スタジオ）と茂木副委員長（個人会員）の２名が担当し、内沼会長の開会の挨拶に続き平成22・23年度の新役員が紹介された後、懇親会が始まる。

続いて乾杯となり、恒例により５月から賛助会員として新たに入会された ミックスウェーブ(株)代表取締役 齊加 博和氏により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。

乾杯の発声・齊加 博和 氏

会場内は自然に何組かの歓談の輪が出来上がり、和やかな雰囲気となった。

20010 懇親会全体

石野 和男 副会長

更に歓談が続くうちに中締めの時間となり、石野副会長による挨拶が行われ、本年の懇親会も無事に終了。

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、有難うございました。

技術セミナーレポート

株式会社サウンドインスタジオ
メンテナンスエンジニア　大槻　博也

６月１日、東放学園音響専門学校にて、JAPRS会員エンジニア17名、専門学校生15名の計32名が参加して技術セミナーが開催されました。

今回のテーマは
「SSLアナログコンソールの概要とメンテナンス」
「Pro ToolsとPCの基本設定とトラブルシューティング」
の２部構成となりました。

○「SSLアナログコンソールの概要とメンテナンス」

講師は(株)ミキサーズラボ　宮内　広 氏。

宮内 広 氏

SSL社4000Gを中心としてお話をしていただきました。

SSL 4000Gはセクションごとに基板が分かれているので、故障時の対応がしやすい作りになっています。今回の参加者には若手のエンジニアの方、学生の方が多く参加されていたので、日常のメンテナンスと基板交換で対応できるメンテナンスのお話が中心となりました。

日常のメンテナンスでは日々の掃除が重要だということで、埃を払うことはもちろんですが、掃除をしながらコンソールを観察することで、ちょっとした変化に気がつくようになります。この段階で対応しておけば大きなトラブルを未然に防げます。

モジュール部の解説では、実際の4000Gのモジュールを見ながら、各セクションの役割と基板の位置、故障やトラブルが多い箇所の説明がありました。

モジュール内の各基板はネジ１本でとまっているだけなので、大まかな故障箇所さえ分かれば必要最小限の基板交換でトラブルに対処できます。

ちなみに基板をとめているネジは「プラス」に見えますが、実は「ポジドライブ」という規格でねじ穴の形状が異なります。普通のプラスドライバーだとネジをなめてしまう可能性があるので注意が必要です。

続いてマスターセクション部の各カードの役割や位置の説明などのお話がありました。

センターセクションもセクションごとにカードが分かれているので、ある程度のトラブルは基板交換で対応できます。センターセクションの基板を交換するにはセンターセクションを持ち上げる必要があり、この作業は２人でやらないと大変危険です。私も過去に１人でやろうとしてケガをしたことがあります。

次に電源系とオートメーションコンピューター系の注意点は、電源ユニットにはファンが付いているのですが、通常、電源ユニットは目のつかないところに設置されていることが多く、年に一度はファンが回っているかの点検をした方が良いとのことでした。また、コンピューターはフロッピーディスクのトラブルが多く、こちらも年に一度は新しいフロッピーに交換することを奨められていました。

○「Pro ToolsとPCの基本設定とトラブルシューティング」

講師は(株)サンミューズ　君塚　隆志 氏。

Pro Toolsの実機を持ち込んでいただき、プロジェクターを見ながら説明していただきました。

参加者のほとんどがMacにてPro Toolsを使用していたので、Macを中心としたPro Toolsを安全かつ快適に動作させる為の設定を説明していただきました。

君塚 隆志 氏

まずはMac本体の基本設定について、普段気がつきにくいバックグラウンドで動作している不必要なプログラムや余計な効果の停止方法など、Pro Tools 以外のプログラムがCPUやメモリに負荷をかけない設定を中心にお話いただきました。

Pro Toolsの設定では禁則文字やハードウエア、プレイバックエンジンの設定を状況に応じてどのようにすればよいのかの説明がありました。

また、最近のレコーディングではPro Toolsが動かなくなると一切の作業ができなくなってしまうので、最小限のバックアップ（カードやケーブル、システムやiLokのバックアップ）を用意しておく重要性を感じました。

○まとめ

私は十数年メンテナンスの仕事にかかわってきましたが、今回、このようなセミナーに参加させていただいて、忘れていたこと、疎かになってしまっていたことなど改めて勉強になりました。講師を務めていただきましたミキサーズラボ宮内様、サンミューズ君塚様に心より感謝を申し上げます。

第11回JAPRS新プロ・エンジニア養成セミナーレポート

平成12年第１回目を開催して以来、今回で11年目を迎えたのが、この新プロ・エンジニア養成セミナーです。

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS賛助会員加盟専門学校18校の２年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオの協力により継続されているもので、プロのレコーディングスタジオにおけるセッション開始前のスタジオセットアップを体験させることを主目的としています。今回は、６月12日（土）～６月19日（土）の期間で東京地区２日間計４回、大阪地区１日２回開催。

＜実施内容＞

①アシスタントエンジニアによるスタジオブースの説明
②アシスタントエンジニアからのアドバイス
③ミックスダウンのセットアップ
④ミックスダウン・デモ
　2chバランス・2chメーターの確認　EQの使用方法　DYN・INS系の使用方法
　クロス・パッチ等　AUX系のエフェクタ・バランス トータル処理の方法

東京地区会場（６月12日（土）～13日（日）於：タワーサイドスタジオAst）
　参加者：９校　55名
　エンジニア：吉田　保 氏
　アシスタントエンジニア：見元　李衣 氏
大阪地区会場（６月19日（土）於：スタジオグルーヴAst）
　参加者：３校　29名
　エンジニア：吉田　保 氏
　アシスタントエンジニア：松嶋　毅之 氏

＜タイムスケジュール＞

東京会場：タワーサイドスタジオ Ast
　６月12日（土）
　　１回目　13：00～15：15
　　２回目　15：30～17：45
　６月13日（日）
　　３回目　13：00～15：15
　　４回目　15：30～17：45

大阪会場：スタジオグルーヴ Ast
　６月19日（土）
　　１回目　13：00～15：15
　　２回目　15：30～17：45

2010年JAPRS企業説明会レポート

受付風景

平成22年6月27日（日）、専門学校生を対象としたJAPRS企業説明会が東放学園音響専門学校・渋谷校舎で開催されました。企業説明会も10回目を迎え、JAPRSの恒例行事のひとつになっています。

開催当日は蒸し暑い中、仙台、新潟、名古屋、大阪地区も含めた熱心な学生たち130名が参集いたしました。

一方、出展側からは正会員スタジオ８社、賛助会員社１社より18名が参加しました。

今回の説明会は東放学園音響専門学校・渋谷校舎を会場として行われました。

まずJAPRS内沼 映二会長から開催の挨拶をいただき、脇田専門学校副委員長より概要の説明、続いて吉田 保専門学校委員会委員長より激励の言葉が述べられ、引き続き出展企業の各社より自社の紹介をしていただきました。

その後、説明会場として各教室に９箇所のブースをつくり、Ⅱ部の前半がスタートしました。今回は１回あたりの説明時間を30分とし、１回目から３回目までは訪問する出展ブースを各学生たちに指定し、後半の４回目と５回目を自由訪問としました。

内沼 映二 会長

吉田 保 委員長

しかし４回目以降もほとんどの学生が帰ることなく参加し、最後まで熱心に質問をしておりました。今回の実施に際し、ご出展いただいた企業の皆様に心より御礼申し上げます。

また、監督指導していただいた先生方、お疲れ様でした。

(株)エムアイティギャザリング

(株)音響ハウス

(株)サウンドインスタジオ

(株)サウンド・シティ

(株)サンライズミュージック

(株)バーディハウス

(株)バーニッシュ

(株)ミキサーズラボ

(株)サンフォニックス

出展企業

(株)エムアイティギャザリング	常務取締役	横山　武
	ブッキングリーダー	原　敬輔
(株)音響ハウス	経理総務部 総務課長	豊田　重成
	録音技術部マネージャー	太田　友基
	録音技術部チーフ	櫻井　繁郎
	録音技術部	中内　茂治
(株)サウンドインスタジオ	主事	河野　洋一
(株)サウンド・シティ	営業部セクションチーフ	服部　裕介
	オーディオ技術部	
	レコーディングエンジニア	内藤　岳彦
(株)サンライズミュージック	代表取締役	佐々木高志
(株)バーディハウス	取締役	横井　俊一
	ブッキングマネージャー	小寺　幸子
	ブッキング	伊藤　敦
(株)バーニッシュ	取締役	江下　規彦
(株)ミキサーズラボ	採用担当	上野　健也
	技術管理部部長	宮内　広
(株)サンフォニックス	管理部総務課課長	西尾　靖彦
	管理部総務課主任	柳下　朋子

(以上敬称略)

第９回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告

７月４日（日）、札幌×２、仙台×２、新潟、東京×６、名古屋×３、大阪×３、広島、博多の８地区19ヶ所の団体受験会場に分散して実施された「第９回サウンドレコーディング技術認定試験」については、当初の受験申請者数657名に対し、欠席者を除く当日の受験者数579名の参加により実施されました。

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の基礎理論／音響機器とスタジオシステム／レコーディング技術と先進技術／音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの４ジャンルから各25問（計100問、1000点満点）が出題されましたが、平均点は707.75点という結果になりました。

専門学校 東京ビジュアルアーツ

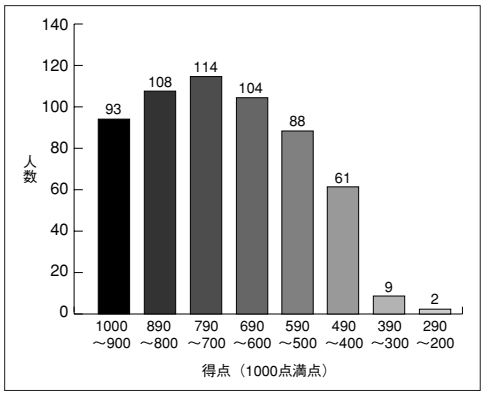
また、昨年度の受験者数540名に対して、本年度は39名が増加いたしました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

（１）受験申請者657名　欠席78名　受験者579名（男性336名、女性243名）
　　最低点220点　最高点1000点（5名）　平均点707.75点

（２）平均点詳細（各ブロック250点満点）
　　Ⅰ.音響の理論　正答率　72.8%　平均点　182点
　　Ⅱ.電気音響とスタジオシステム　正答率　65.2%　平均点　163点
　　Ⅲ.レコーディング技術と先進技術　正答率　72.7%　平均点　182点
　　Ⅳ.音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など　正答率　72.4%　平均点　181点

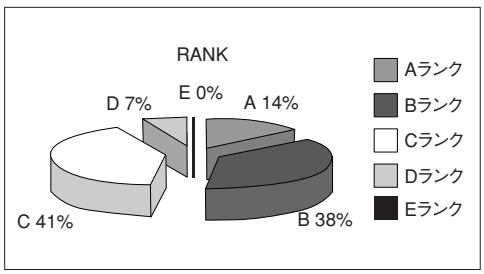
（３）得点別人数

1000～900	93名
890～800	108名
790～700	114名
690～600	104名
590～500	88名
490～400	61名
390～300	9名
290～200	2名
計	579名



（４）ランク別人数

Aランク	1000～901点	82名
B　〃	900～701点	218名
C　〃	700～451点	240名
D　〃	450～201点	39名
E　〃	200点以下	0名
計		579名



最新のBlu-ray&DVDオーディオ・コーデック技術勉強会レポート

平成22年７月29日　15：00～17：20（株）ソナ　リスニングルーム

（有）エフ　藤田　厚生

映像コンテンツはVHS/βテープというアナログからLD,DVDへとデジタル化され、それに伴って記録容量も増加し、音声フォーマットも2chステレオから5.1chサラウンド対応に変化してきました。DVDコンテンツの制作に当たっては、4.7GBという限られた容量の為に、映像と音声のクオリティーを同時に保つ為の工夫が必要でした。特に我々音楽録音を常に行っているエンジニアにとって、DolbyやDTSという圧縮技術を如何にうまく使いこなすかということが音のクオリティの確保には必要な知識や技術でした。今回のJAPRSの勉強会では、既に2006年から発売されているBlu-rayについては、容量が23GBと非常に大きくなったことで変更になった音の圧縮フォーマットの具体的な内容を、DOLBYについてはDolby Japanの中山尚幸氏に、DTSについてはdts Japanの近田まり子氏に説明していただきました。会場は（株）ソナ リスニングルーム。参加者はマスタリングエンジニア、レコーディングエンジニアなどを中心に18名でした。

➢Dolby

Blu-rayで使用可能なフォーマットについて

中山 尚幸 氏

Blu-Rayに使用可能なフォーマットは、従来のDVDに使用されていたDolby Digitalに加えて、Dolby Digital PlusおよびDolby TrueHDの３通りのフォーマットです。DVDからのDolby Digital は最大チャンネル数5.1chと変更ありませんが、転送レートの上限が448kbps（DVD）からDolby Digitalの最大転送レートである640kbpsまで使用可能になります。

Dolby Digital Plusは最大チャンネル数7.1ch, 転送レートは1.7Mbps（BDの場合）まで、さらに、Dolby TrueHDはロスレスの可逆圧縮で、最大チャンネル数8ch、転送レートは可変（Variable）で最大18Mbpsとされました。音声仕様は192kHz/24bitまでとなります。

従って、映像のクオリティー重視の作品の制作の場合はDolby Digital Plusを選択し、音声のクオリティー重視の作品の制作の場合はDolby TrueHDを選択するというように選択の幅が広がりました。仮に、映像に最大転送レート（40Mbps）を割り当てると、オーディオ用には6Mbps程度しか残らない為（※トランスポートストリーム化のためのマージンを確保している）、LinerPCM/48kHz/24bit/6chでの収録は困難になります。その為にTrueHD のようなロスレスエンコードが必要なのです。制作時にTrueHDを選択すると、同時にDolby Digitalも伴った形でエンコードされる為、古いAVアンプでも再生が可能となっているそうです。

再生環境への互換性について

PCMでBDに収録した場合再生側の環境（プレイヤーあるいはケーブルテレビのSTB［セットトップボックス］）によってはダウンミックス係数およびダイナミックレンジコンプレッション（DRC）の特性もそれぞれ異なるようですが、Metadataを使用するDolbyのコーデックでは、デコーダの振る舞いをコントロールすることができるので、制作者の意図をデコーダに反映させることが可能とのことです。さらに、Blu-rayではSecondary Audio channelという新たな規格が生まれ、それとプレイヤーの音声出力経路についても説明があり、BDを試聴する際に収録された音声の能力を100%Hi-Fiで出力するためには、機器の設定を確認する必要がありそうです。

ソフトウエアについて

制作側の作業のポイントとして、作品の内容（映画なのか音楽なのか）によって、再生環境も異なるため、それにふさわしいエンコードを選択する必要があることがわかりました。いくらBlu-rayの容量が大きくなったとはいえ、それを再生するには限界があるからです。エンコードする為のソフトウエアとして、Dolby Media Producer（DMP）が発売されており、これを使用することで、わかりやすいGUIによって、容易にエンコードの選択およびトラックアサインの設定が可能です。Trainというアーティストの PVを例に実際に操作して音を聴きながらデモンステレーションをしていただきました。今回の会場が、（株）ソナ様のリスニングルームを提供していただいたこともあって、完璧な調整のもとで試聴できたこともあり、どのフォーマットも全く問題ない音質でした。

ただし、残念なことにこのソフトウエアでのエンコードは、ほぼリアルタイムがかかるとのことで、運用にはスタジオ内にサーバーを設けるなど作業の効率化には工夫が必要だということでした（セミナーの１週間後、DMPのアップデータがリリースされ、エンコード時間は約1/3実演奏時間となりました）。

➢DTS

Blu-rayで使用可能なフォーマットについて

近田 まり子 氏

新たにBlu-ray用に加わったフォーマットは３フォーマット。本編等、主音声として使用されるプライマリー・オーディオでは、DTS-HD Master Audio、DTS-HD High Resolution Audioの２つ。Picture In PictureやBD-Jなどで使用されるセカンダリー・オーディオでは、DTS Expressとなります。従来のDVDでオプションとして採用されていたDTS Digital SurroundはBlu-rayの必須音声となり、この必須音声であるDTS Digital Surroundが下位互換性を必ず保証することにより、Blu-rayではオプションとなっているの DTS-HD Master Audioなど（他には、DTS-HD High Resolution Audio, DTS96/24, DTS-ES）のフォーマットでも、必ずBD Playerでデコードされ、音として出力されます。DTS-HD Master Audioは最大25.4Mbpsのビットレート領域まで保証されており、ロスレスの可変ビットレートが採用されています。スペックとしては、サンプリング周波数が192kHzまで対応（5.1ch）、96kHzでは7.1chまで対応し、かなり高音質指向になっていることがわかります。

ソフトウエアについて

Blu-ray用のDTS音声を作成するうえで必要不可欠な「エンコーダー」には、２つの選択があります。１つは、DTS社からリリースされているDTS-HD Master Audio Suite。もう１つは、Minnetonka社製のSurCode For DTS-HD（Apple Compressor内プラグイン）。DTS-HD Master Audio Suiteには、wav fileの取り込みからエンコードを行う「DTS-HD Encoder」、エンコードしたファイルの編集が可能な「DTS-HD StreamTools」、デコード機能としての「DTS-HD StreamPlayer」が１パッケージとなっており、オーサリングソフトとの連携まで一括した作業が可能になっています。驚くことに、エンコードに要する時間が実時間の1/3～1/4であることも大きな特徴となっています。

さらに、エンコーダーとは別の角度からBlu-rayでのマルチチャンネル化を推進するうえで有効な、Neural UpMixと言うアップミックスソフトの紹介とデモンストレーションが行われました（このソフトは、ProToolsのプラグインとしてリリースされており、DTS音声を作成するには、このNeural UpMixを通した後、エンコーダーにてDTSストリーム化する必要があります）。このプラグインを使用すると、5.1chから7.1chに展開したり、2ch音源についても、5.1および7.1へサラウンド化することが可能になります。今回の勉強会では、ある映画の１シーンを2ch→5.1ch、5.1ch→7.1ch化したデモを行い、このプラグインの効果を試聴しました。位相の違和感も少なく、非常に効果的な、いかにもDTSらしいレンジの広い音を聴くことができました。

米国でのBDタイトルに関して

2006年にBDソフトが発売されて、今年で４年目を迎えるなか、ハリウッドメジャーが選択する音声フォーマットは淘汰され始めているようです。2006年から2010年の４月までリリースされた全てのBDソフトの半数近くがDTS-HD Master Audioを採用しており、今年の第一四半期にリリースされたBDソフトにいたっては、７割近くものタイトルがDTS-HD Master Audioを採用しているようです。

大容量と言われるBlu-rayであっても、音声コーデックが不可欠であるということが、マーケットデータから伺い知ることができました。

感想

今年に入って、映像の分野では3D化が一気に加速し、Blu-rayはこういったコンテンツに欠かせないパッケージメディアです。それに伴って、オーディオもその映像の効果をさらに高める為の処理が求められています。今回の勉強会は今のそのような状況にぴったりの内容だったと思います。中山さん、近田さん、お疲れさまでした。ありがとうございました。

第７回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告

PT試験　経専音楽放送芸術専門学校

９月12日(日)、札幌×2、仙台×2、福島、新潟、東京×6、横浜、名古屋、大阪×３、神戸、広島、博多、鹿児島、沖縄の13地区22ヶ所の団体受験会場に分散して、「第７回JAPRS認定Pro Tools技術認定試験」が実施されました。本年度の受験者数は、昨年度の478名に対して504名(26名の増加)という結果となり、団体受験会場も新たに鹿児島、沖縄地区が加わりました。

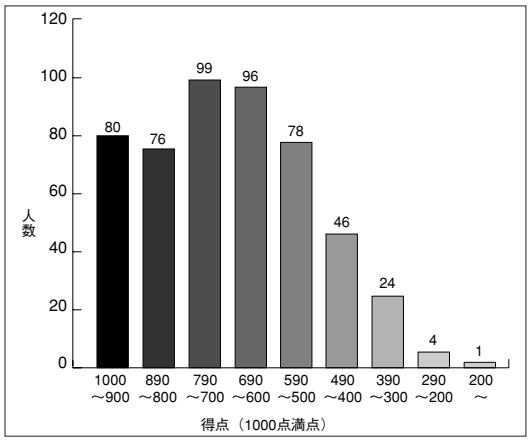
また、今回の試験については、昨年と同様に受験者個々のPro Toolsに関する知識をより明確に把握するために、初級50問(500点)、中級50問(500点)の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools概要」「録音・編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・用語集など」に区分された出題としたが、初級問題の正答率は76.4%、中級問題については61%、全体的な正答率は68.7%という結果になりました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

（１）受験申請者603名　欠席99名　受験者504名（男性284名、女性220名）
最低点190点　最高点1,000点　総合平均点690.44点

（２）平均点詳細
初級1（Pro Tools概要／130点）：110.9点
初級2（録音・編集／120点）：84.6点
初級3（ミキシング／130点）：105.9点
初級4（シンク・MIDI・ファイル管理など／120点）：82.9点
◆初級計 384.4点
中級1（Pro Tools概要／120点）：76点
中級2（録音・編集／100点）：58.2点
中級3（ミキシング／140点）：88.5点
中級4（シンク・MIDI・ファイル管理など／140点）：83.4点
◆中級計 306.1点

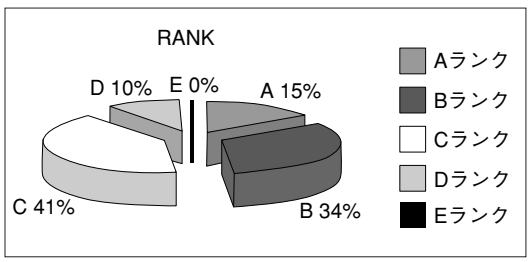
（３）得点別人数

1000～900	80名
890～800	76名
790～700	99名
690～600	96名
590～500	78名
490～400	46名
390～300	24名
290～200	4名
200～	1名
計	504名



（４）ランク別人数

Aランク	1000～901点	75名
B　〃	900～701点	169名
C　〃	700～451点	208名
D　〃	450～201点	51名
E　〃	200点以下	1名
計		計 504名



ラウドネスメータ勉強会レポート

株式会社サウンドインスタジオ　河野　洋一

2011年７月アナログ放送終了に向けたデジタル放送の普及が急速に進み、地上波デジタル、またはケーブルテレビ等のさまざまなデジタル放送ソースを視聴できる機会が増えました。視聴の際にご経験あるかと思いますが、チャンネルザッピングをすると、チャンネルによって音が大きかったり聴きづらかったりすることがよくあります。実はこの問題は日本よりも海外の方で以前から問題になっており、この問題を解決するために研究が進んできたのが今回のラウドネスメータになります。

９月30日（木）に実施された今回のセミナーでは日本ラウドネスメータ協議会と東放学園音響専門学校の全面協力のもと、ラウドネスメータに関する座学と、実際にメータに音声信号を送ってどのように表示されるかというデモンストレーションの２部構成で行ないました。

◯ラウドネスメータとは？

原田 崇 氏

音の大きさを測定するものとしては今まで騒音計などがありましたが、これは音圧を測定するものであり、今回のラウドネスメータは電気的に音の大きさを測定するものです。

また、普段使用しているVUメータやピークメータの様に、ある程度瞬間的なレベルを見るものではなく、ソース全体の平均的な音の大きさを測定するものになります。

この測定方法を策定しているのが、ITU-R（国際電気通信連合 無線通信部門）で、勧告書としてはITU-R BS.1770-1というもので定義されています。

◯計算方法

原理としては、決まった時間内の音声信号の二乗平均値を計算し、ひとつの値を出す、ということになります（２時間の映画のラウドネス値が70、というように）。

実際には人間の頭部形状による周波数特性を硬質球体に置換してシミュレートしたPre filterと、Ｂ特性に似た特性を持つRLB filterを使って各周波数別に計算した数値を、二乗平均し合計したものになります。

◯ITU-R BS1770-1の問題点

例えば同じ２時間のラウドネス値でも、ライブなどある程度一定の音の大きさのソースに関しては、上記の計算方法でいいのですが、映画など静かなシーンや無音のシーンが多く有るようなコンテンツだと、平均的な音の大きさを出すのが難しい（誤差が大きくなる）物が出てきます。この問題を解決するため、EBU（欧州放送連合）のTECH 3341という技術文書で定義されています。

◯EBU TECH 3341について

EBU TECH3341では、音声信号をある程度の時間幅で区切ってその平均値を計算するセグメント化、セグメントを作成する際に前後との相関を持たせるためのオーバーラップ、無音など極端にラウドネス値が低くなるセグメントを除去するゲーティングを行い、より現実に沿ったラウドネス値が出るように工夫されています。

南澤 貞巳 氏

◯実機によるデモンストレーション

日本ラウドネスメータ協議会の加入11社による実機のデモンストレーションを見せていただきました。一同に介して同じ音声信号を用いてデモンストレーションするのは初めてとの事で、表示方法など各社のこだわりを比較することができ、非常に貴重な体験をさせていただきました。

◯ラウドネスメータの今後

ITU-RではEBUからの提案を受け、BS.1770へ上述のセグメント化やオーバーラップ、ゲーティングを追加することを検討中です。2011年２月頃にはBS.1770が改定される見込みです。これを受けて、日本では電波産業会（以下ARIB）が技術基準を策定中です。この技術基準は、早ければ2011年の春に公開される予定です。

ARIBで技術基準が策定されれば、引き続いて各局の運用や納品基準が決まっていくと思われますので、2011年度はラウドネス元年と言える年になりそうです。

◯最後に

急なお願いにもかかわらず非常に分かりやすい解説をしていただきました、株式会社東陽テクニカ南澤様、株式会社エス・シー・アライアンス原田様、実機によるデモンストレーションを行っていただきましたラウドネスメータ協議会の皆様、場所を提供いただきました東放学園音響専門学校 脇田様に心より感謝を申し上げます。

2010年JAPRS大阪地区Pro Toolsセミナーレポート

専門学校ESPエンタテインメント
サウンドクリエイター科　学科長　今村　典也

2010年10月９日（土）に専門学校ESPエンタテインメントにて開催されました。

15：30より専門学校の学生対象のセミナー、17：30より一般の音楽スタジオやMAスタジオのエンジニアの方々対象のセミナーという２部形式で行い、専門学校向けでは専門学校ESPエンタテインメント、キャットミュージックカレッジ専門学校、ビジュアルアーツ専門学校・大阪の３校の学生24名が参加、一般向けでは36名が参加されました。

今回のセミナーは６月に東京で行なわれた技術セミナーを関西地区でも開催するという目的で、STUDIO GROOVEの井筒氏（関西地区運営委員長）を中心に企画され、関西地区のニーズにより合致する形ということで、Pro Toolsの技術セミナーに絞った開催となりました。テーマとしては「PCの基本設定とトラブルシューティング」という内容で、（株）サンミューズ　君塚 隆志氏と赤尾 真由美氏を講師としてお迎えして行なわれました。

○『Pro ToolsとPCの基本設定とトラブルシューティング』

現在、最もポピュラーな組み合わせである「MacによるPro Toolsの使用」という前提で行なわれました。MacとPro Toolsのシステムを持ち込まれて、その画面をプロジェクターに投影しながら、詳しく説明していただきました。

まずはMacの基本設定と言うことで、dock及びシステム環境設定の解説となりました。

具体的にはdockの設定として「ディスクユーティリティー」+「システム環境設定」+「Pro Tools」+「サファリ」程度の非常にシンプルなセッティングを推奨されておられ、システム環境設定に関しても、「スクリーンセイバー」「スポットライト」「スリープ設定」「アップデートの確認」などバックグラウンドで動作するプログラムや、「キーボードショートカットのユニバーサルアクセス」や「タイムマシン機能」、「ヴォイスオーバー機能」といった動作の非常に重いプログラムを「OFF」に設定しておくことで、Pro Tools 以外のプログラムでCPUやメモリに負荷をかけない設定方法を中心に説明していただきました。

Macのハードウェア的な問題に関しても、ハードディスクのフォーマットからバックアップ用のHDの準備、トラブル時の自己対策として、「コールドブート」「P-RAMのクリア」「CDの強制排出」などの方法がレクチャーされました。また、自己でトラブルを解決できない場合はサポートセンターやディーラーの担当者を通して問題解決していくことになりますが、その際に必要となってくる「スクリーンショットの撮り方」に関しても説明していただけました。

Pro Toolsに関しては「9073アラート」の原因や対処方法、「禁則文字使用」に関する注意事項、「バッファサイズ」や「プレイバックエンジン」の設定などについて解説していただきました。

また、Pro Toolsの動きが不穏な場合の「アプリケーションリセット」や「デジテスト」の方法についてのレクチャーもあり、Pro Toolsのトラブルシューティングに関しても非常に有意義なお話をうかがうことができました。

管理編として、MacOSやPro Toolsソフトウェアのアップグレード時の注意事項、ネット環境がない場合の対応方法、i-Lockやプラグインの管理方法等の説明が行なわれ、また2.8GHzのMacProのビデオカードトラブルや192 I/OのA/Dカードのトラブルといった、ディーラーだからこそ知り得るトラブル情報の開示などもしていただけました。

君塚 隆志氏　赤尾 真由美氏

今回はAvidの新製品発表と時期が重なったため、HD I/O・HD OMNI・HD MADIなどの新製品を持ち込まれ、それぞれの特徴や新機能である「HEAT」に関しての解説も伺うことができたのも大きな収穫と言えるのではないでしょうか。

○まとめ

今回は、基本的な設定事項やトラブルシューティングの方法など、非常にベーシックな内容ながら、なるほどと気づかせてくれるポイントが多くありました。

最近はコンピューターも性能が上がり、あまり細かいことを気にせず作業ができる状況になっていますが、あらためて基本設定やトラブル対応に関しての知識を持っておくことの重要性を思い知りました。特に学生や若いエンジニアの方は、こういった情報を持たずに作業をしていることも多いと思いますので、非常に有意義かつためになるセミナーになったのではないでしょうか。

私自身、最近はPCの設定などに無頓着になっていましたので、初心に帰って取り組むきっかけとなりましたし、学生に対しても授業などにフィードバックして、こういった情報を伝えていかなければならないと強く思いました。

このたびは、わざわざ東京からお越しいただいた(株)サンミューズの君塚 隆志氏と赤尾 真由美氏には心より感謝申し上げます。また、この大阪地区セミナー開催にご尽力いただいた関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

第17回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート

内沼 運営委員長

「日本プロ音楽録音賞」は、平成５年に当協会が制定した「JAPRS録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成６年より実施されているものです。

今回第17回目の実施にあたり、(社)日本音楽スタジオ協会および（社)日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、(社)日本レコード協会、演奏家権利処理合同機構 Music People's Nestの５団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、(社)日本民間放送連盟の協賛、サウンド＆レコーディング・マガジン、CDジャーナル、ステレオサウンド、レコード芸術の賛助、並びにビクターエンタテインメント(株)、オタリテック(株)、(株)ソナ、アビッドテクノロジー(株)、ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン（株)、東放学園音響専門学校の協力により「第17回日本プロ音楽録音賞」を実施し、平成22年12月６日(月)、御茶ノ水 東京ガーデンプレイス２F「高千穂」に於いて授賞式、パーティが開催され、受賞作品および受賞者の発表が行われました。

今回の授賞式も「音の日」のイベントとして開催され、はじめに内沼会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、続いてプロ音楽録音賞に対し後援を得ている経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐 木本直美氏が来賓代表として挨拶された後、４部門計10作品およびベストパフォーマー賞、アビッド賞、SSL賞について表彰が行われました。

木本 直美 氏

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の４部門およびベストパフォーマー賞、アビッド賞、SSL賞を対象に行われ、全52作品の応募から部門Ａ：３作品、部門B：３作品、部門C：１作品、部門D：３作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門１作品が最優秀作品として選定され、更にベストパフォーマー賞１作品、アビッド賞１作品、SSL賞１作品が選ばれました。

部門Ａ：2chパッケージメディア／応募作品16点
クラシック、ジャズ等
部門Ｂ：2chパッケージメディア／応募作品23点
ポップス、歌謡曲等
部門Ｃ：サラウンドパッケージメディア／応募作品3点
SACD 、DVD-Audio、DVD-Video、
Blu-ray Discのマルチchサラウンド
部門Ｄ：放送メディア／応募作品10点
放送作品部門（ラジオ番組：AM、FM、
衛星放送、テレビ番組：地上波、衛星放送）
ベストパフォーマー賞
アビッド賞
SSL賞

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品およびベストパフォーマー賞、アビッド賞、SSL賞を紹介するとともに、最優秀作品として表彰された代表エンジニアの方々およびベストパフォーマー賞のアーティスト、アビッド賞、SSL賞の代表エンジニアにアンケートを依頼し、受賞の感想、作品のコンセプトについてコメントをいただきましたので、20頁以降に掲載させていただきます。

第17回日本プロ音楽録音賞
授賞式次第

1、主催者代表挨拶

第17回日本プロ音楽録音賞　運営委員長
社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二

2、ご来賓ご挨拶

経済産業省　商務情報政策局
文化情報関連産業課 課長補佐　木本　直美 様

3、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

部門A
社団法人日本オーディオ協会　会長　校條　亮治
社団法人日本音楽スタジオ協会　専務理事　清水　三義

部門B
一般社団法人日本レコード協会　専務理事　水村　雅博
日本ミキサー協会　理事長　梅津　達男

部門C
社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二
ビクターエンタテインメント株式会社　ビクタースタジオ長　高田　英男

部門D
日本放送協会放送技術局制作技術センター　専任局長　毛塚　高栄
社団法人日本音楽スタジオ協会　顧問　淺見　啓明

4、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

演奏家権利処理合同機構
ミュージック ピープルズ ネスト　副代表幹事　松武　秀樹
代表幹事　椎名　和夫

5、アビッド賞の発表及び表彰並びに審査員講評

アビッド テクノロジー株式会社
チャンネルセールスマネージャー　常盤野　司
ビクターエンタテインメント株式会社　ビクタースタジオ長　高田　英男

6、SSL賞の発表及び表彰並びに審査員講評

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン株式会社　取締役　野口　真一
ビクターエンタテインメント株式会社　ビクタースタジオ長　高田　英男

7、受賞者代表挨拶

部門D　最優秀賞　メイン・エンジニア　爲田　あかね

以上

部門A　「2ch パッケージメディア」クラシック、ジャズ等
（写真は☆印の代表エンジニア）

【最優秀賞】

■作品「BIG BAND SOUND～甦るビックバンドステージ～」(WPCL-10853)より
「オール･オブ･ミー」
角田 健一ビッグバンド　SACD

発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン

☆マスタリング・エンジニア：菊地　功
（株式会社ミキサーズラボ）

＜受賞のことば＞

ミキサーズラボの菊地 功と申します。この度は、第17回日本プロ音楽録音賞部門A最優秀作品に選出され大変光栄なことと思っております。

今回の作品は、ビッグバンド（角田健一ビッグバンド）作品で応募しました。３年前にも応募したものの、第２弾ということになります。前回は、DVD-Audio 5.1chでしたが、今回はSACD-2chというカテゴリーです。DVD-AudioとSACDというハイクオリティー音楽の双璧に携わり非常に面白い経験をしました。どちらが優れているとか素晴らしいとかというよりも、PCMとDSDの持っている特性違いが音に現れています。音の差は聴く環境によっても違うのでしょうが、SACDについてはハイエンドまで伸びたサウンド、特に今回の作品で言えばトランペットのハイトーンからそのリバーブについては一聴の価値があります。是非皆様も体験し実感していただけたら、と思います。

最後に、この日本プロ音楽録音賞に携わってご尽力された関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

○メイン・エンジニア：内沼　映二（株式会社ミキサーズラボ）
○スタジオ・アシスタント：小坂　康太郎（株式会社ミキサーズラボ）
○マスタリング・アシスタント：加藤　拓也（株式会社ミキサーズラボ）

【優秀賞】

●作品「Born to Sing」（COCB-53916）より
「Talking Low」SHANTI

発売元：コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社

☆メイン・エンジニア：塩澤　利安（日本コロムビア株式会社）
○マスタリング・エンジニア：佐藤　洋（日本コロムビア株式会社）
○アシスタント・エンジニア：田淵　章宏（メモリーテック株式会社）

●作品「Close Your Eyes」（PCCY-50065）より
「'Round Midnight」Woong San

発売元：株式会社ポニーキャニオン

☆メイン＆マスタリング・エンジニア：川崎　義博
（株式会社ポニーキャニオン）

部門B「2ch パッケージメディア」ポップス、歌謡曲等
（写真は☆印の代表エンジニア）

【最優秀賞】
■作品「金剛九尾」（KICS1484）より
「蒼き独眼」陰陽座

発売元：キングレコード株式会社

☆メイン・エンジニア：増田　晋
（株式会社キング関口台スタジオ）

＜受賞のことば＞

この度「最優秀賞」に選んで頂きまして、大変光栄に思っております。私は、2002年よりこの陰陽座と一緒に仕事をするようになりました。今のサウンドになるまで、試行錯誤をくり返し、バンドのメンバーと話し合い、共に悩み、考えながら歩んできました。正直、先が見えない時もありました。このような経過の中での受賞、喜びもひとしおでした。

サウンドメイクで注意した点は、各楽器（Dr.Bass.Gt.）の音を太く保ち、レンジが狭くならない様にすることでした。そして、それが三味一体となって融合し、男女のツインボーカルが乗った時、更にドライブ感が増すよう心掛けました。そうですね、作品のコンセプトを一言で言うとスピード感でしょうか。聞いた瞬間、体が動いてしまう、そんなサウンドが理想だと思います。

私と一緒に9年間、陰に陽にスタジオで頑張ってくれた吉越君、いつもわがままを聞いてくれたマスタリングの渋沢君、本当に感謝しています。そしてディレクターの遠藤さんと、決して求めるサウンドを諦めなかったバンドのみんな、このような人々がいたから頂けた賞だと本当に痛感しております。

私はレコーディングの仕事を始めて、早いもので20数年が経ちますが、今迄お世話になった諸先輩の方々、そして後輩たちに、深く感謝しております。この気持ちを決して忘れず、今後の仕事も、日々挑戦の思いで頑張っていきます。ありがとうございました。

○マスタリング・エンジニア：渋沢　賢（株式会社キング関口台スタジオ）
○セカンド・エンジニア：吉越　晋治（株式会社キング関口台スタジオ）

【優秀賞】

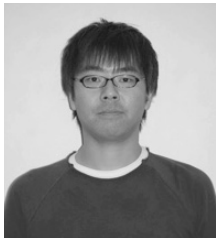
●作品「レイン」（KSCL1597）より「レイン」
シド

発売元：株式会社キューンレコード

☆メイン・エンジニア：原　裕之（SIGN SOUND LLC）
○マスタリング・エンジニア：Ted Jensen（sterling sound）

●作品「君にサヨナラを」（VIZL-380）より
「君にサヨナラを」桑田　佳祐

発売元：ビクターエンタテインメント株式会社



☆メイン・エンジニア：中山　佳敬
（ビクターエンタテインメント株式会社）
○マスタリング・エンジニア：小島　康太郎（FLAIR MASTERING WORKS）
○アシスタント・エンジニア：髙須　寛光（ビクターエンタテインメント株式会社）
○アシスタント・エンジニア：金井　亮（ビクターエンタテインメント株式会社）

部門C「サラウンドパッケージメディア」SACD、DVD-Audio、DVD-Video、Blu-ray Discのマルチchサラウンド（写真は☆印の代表エンジニア）

【最優秀賞】
今年度該当作品はありませんでした。

【優秀賞】

●作品「TOSHIKI KADOMATSU Citylights Dandy」（BVXL5）より
「HOT LAZY NIGHT」角松　敏生　Blu-ray Disc

発売元：Ariola Japan Inc.

☆メイン・エンジニア：川澄　伸一（株式会社ミキサーズラボ）
○マスタリング・エンジニア：前田　康二
（バーニーグランドマンマスタリング東京）
○アシスタント・エンジニア：石　光孝（株式会社ミキサーズラボ）

部門D「放送メディア」放送作品部門（写真は☆印の代表エンジニア）

【最優秀賞】

■作品「題名のない音楽会／坂本　龍一～箏の魅力」より
「坂本 龍一　箏とオーケストラのための協奏曲 4.autumn」
箏：沢井　一恵　指揮：佐渡　裕　演奏：兵庫芸術文化センター管弦楽団

株式会社テレビ朝日　HDTV 5.1ch 2010年5月16日放送

☆メイン・エンジニア：爲田　あかね
（株式会社テレビ朝日）

＜受賞のことば＞

このたびは、第17回日本プロ音楽録音賞放送メディア部門 最優秀賞という栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。

また、17回の歴史で女性メインエンジニア初の最優秀賞受賞ということには驚きましたが、女性エンジニアが増えてきたことの証になったのではないかなと思っています。

今回受賞した作品の収録は、私にとって箏を収録するのは初めてであり、特殊奏法もあり、PA出しもしており、不安いっぱいな収録でした。

そんな中、何も言わなくとも的確にオケ中のマイクを狙ってくださったアシスタントの方々、箏のマイクの狙いにアドバイスを下さった方、過酷な状況下にもかかわらず、こちらのオーダーにも応じてくださったPA担当のタムコの方々など、音チームの全員の力が集結した結果が音に反映され受賞につながったと思っています。

この収録では、箏のマイクの位置による音の変化や初めて吊った木管用のマイクの自然な音など得るものが多く、音を録るって面白い！と感じた転機となった収録でした。その音を評価していただけて大変励みになりました。

最後に、すばらしい演奏をしてくださった方々や「題名のない音楽会」スタッフ、このような機会を与えて下さった全ての方々に感謝しています。本当にありがとうございました!!

○セカンド・エンジニア：早川　憲一（株式会社テレビ朝日）
○アシスタント・エンジニア：須崎　泰道（株式会社日放）
○アシスタント・エンジニア：井上　哲（株式会社テイクシステムズ）

【優秀賞】

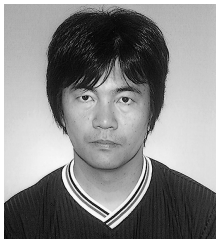
●作品「第23回どれみふぁワンダーランド」より「ジョニー・エンジェル」
戸田　恵子　RAGFAIR　宮川　彬良

NHK　HDTV stereo　2010年6月5日放送

☆メイン・エンジニア：野口　康史（日本放送協会）
○セカンド・エンジニア：高橋　義洋（株式会社ネオテック）
○セカンド・エンジニア：鶴田　孝雄（株式会社NHKメディアテクノロジー）
○セカンド・エンジニア：菊池　里美（株式会社エフエフ東放）

●作品「祷りの響き～2009 SAITO KINEN FESTIVAL MATSUMOTO～」
より「ブリテン 戦争レクイエム LIBERA ME 我を解き放ちたまえ」
指揮：小澤 征爾　サイトウ・キネン・オーケストラ

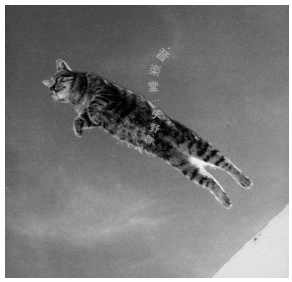
長野朝日放送株式会社　HDTV 5.1ch 2009年12月20日放送



☆メイン・エンジニア：岩井　和久（長野朝日放送株式会社）
○セカンド・エンジニア：都鳥　真（長野朝日放送株式会社）

ベストパフォーマー賞
■作品「音楽堂」（YCCW-10108）より「右手」
矢野　顕子

発売元：株式会社ヤマハミュージックコミュニケーションズ



アーティスト：矢野　顕子

＜受賞のことば＞
細美 武士さんの曲と吉野 金次さんの録音の良さで、この演奏はなりたっています。楽しんでいただけてうれしいです。ありがとー。　矢野　顕子

アビッド賞
■作品「A TIME FOR LOVE」（VICJ-61609）
より「SWAY（QUIEN SERA）」
FRIED PRIDE

発売元：ビクターエンタテインメント株式会社

☆メイン・エンジニア：高桑　秋朝
（ビクターエンタテインメント株式会社）

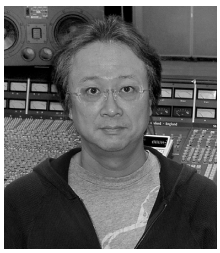
＜受賞のことば＞
今回、すばらしい賞をいただき大変光栄であるとともに、とてもうれしく思っております。
この作品はFried Prideの７枚目にあたるアルバムの一曲目に収録されている曲で、Vocal＋AGのFried Prideお二人に加え、ゲストミュージシャンとしてトランペット、パーカッション、フラメンコのパルマ（手拍子）、ハレオ（かけ声）が参加するという、少し変わった編成の作品です。ベーシックとなるVocal、AGのレコーディングはビクター山中湖スタジオで行い、ゲストの方々はビクター302スタジオ等、都内のスタジオでダビングするという形で行われました。
Bassレスという事もありバランスをとるのは大変苦労しましたが、無理にまとめようとしない事を意識してMixしています。
演奏の修正的なEDITはしていないのですが、アレンジ的な部分でPro ToolsのEDIT機能を積極的に使った作品でもあります。最近はDAWを使ってのレコーディングでEDITをする事が当たり前になっていますが、その中でも最も効果的にその機能を利用

出来た作品の一つではないかと感じています。
　とはいえ、そういった部分をあまり感じさせず、全体でこの曲の持つ緊迫感、勢い、演奏の臨場感を感じて頂けたら幸いです。
　最後に、この作品の制作にあたりご指導ご協力いただいたFried Prideのお二人、マスタリングエンジニア川﨑 洋氏、レコーディングエンジニア田村 雅典氏、アシスタントエンジニア金井 亮氏、ご協力いただいたスタッフの皆様にあらためて感謝申し上げます。ありがとうございました

SSL賞

■作品「みちくさ日和」（SECL842）より
「愛妻日和 feat. 曽我部 恵一」Fairlife

発売元：SME Records Inc.



☆メイン・エンジニア：三浦　瑞生
（株式会社ミキサーズラボ）

＜受賞のことば＞
　今回大変名誉な賞を頂く事になりましてありがとうございます。一緒にこの楽曲の制作に関わった方々にも感謝すると共に、この受賞の喜びを分かち合いたいと思います。
　今回の楽曲に関しては、Drums、Bass、Apf、Cla、Voが全て同録という形で、正にミュージシャンの音による会話を、どれだけ上手く収録出来るかと言う事が課題でした。録音に関しては、さして目新しい事はやっていませんが、気を付けたのは基本を大切にという事でした。マイクスタンドの使い方も含めたマイクアレンジの仕方、適正な録音レベルで録るという事、演奏しやすいモニターバランスのとり方、Mixに関しては、歌まで同時に録った臨場感を損なわない様に、また出音が素晴らしかったので、厚化粧にならない様に気を付けました。そんな中でSSLのコンソールは、自分がエンジニアとしてのキャリアを始めてからずっと一緒にやって来た仲間という感じで、特別意識をせずに自分の手足の延長の様な感覚で操作が出来るのが有難いです。各トラックをバラバラにコンソールに立ち上げ、アナログ領域でMixした結果が、この賞に繋がったのではと考え、とても嬉しく思います。これを励みに更に頑張りたいと思います。ありがとうございました。

審査委員会

総合審査委員長	内沼　映二
副審査委員長	高田　英男
部門A･B･C審査委員	内沼　映二、梅津　達男、椎名　和夫、塩澤　利安、 清水　邦彦、清水　三義、髙城　　賢、高田　英男、 高橋　邦明、藤田　厚生、松尾　順二、松武　秀樹、 山口　照雄、吉田　　保、脇田　貞二、渡辺　昭人
部門D審査委員	淺見　啓明、石野　和男、加藤　茂樹、亀川　　徹、 清水　幸男、浜田　暁弘

（以上50音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったメイン・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞のアーティストに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタントエンジニアには表彰状を贈呈。また、アビッド賞およびSSL賞についてはメイン・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。

なお、部門Ａ、Ｂの最優秀賞については、優秀なスタッフと良好な環境を提供されたメインのスタジオについても表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。

クリスタル製の表彰楯を手にした受賞者の皆さん

第17回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評

＜部門A　2chパッケージメディア（クラシック、ジャズ等）＞

(社)日本音楽スタジオ協会
専務理事 清水 三義

ただいまご紹介頂きました日本音楽スタジオ協会清水でございます。
今回、部門Aの講評をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

講評をさせて頂く前に一言述べさせて頂きます。
第１回より昨年まで講評を続けられていました大野進さんが、大変残念なことに９月に帰らぬ人となられました。この16年間の功績を讃えるとともに、改めてご冥福をお祈りさせて頂きます。

さて、部門Aの講評ですが、今年は応募作品数が16作品と例年に比べて寂しい応募数でした。ちなみに昨年は28作品と聞いております。
部門Aはクラシック、Jazzと言うことも有り、演奏者の音楽そのものをいかに忠実にとらえるか、それにはマイクロホンの選択やポジションの工夫は勿論ですが、経験に裏打ちされた技術や感性が問われます。今回はそれらを駆使した作品が多く、少ない応募では有りましたがレベルの高い作品が集まったように思います。

そんな中での優秀作品、コロムビア塩澤さんの「Talking Low」ですが、聴いてまず思う事は、奥行きが感じられる素直な心地よいサウンドです。
低域を支えるキック、ベース、存在感のあるリムショットを中心に、両サイドのギターが大変心地よく曲を構成しています。
それに、透明感の有るボーカルが乗り、聴く人を曲に引き込みます。
SHANTIの若々しさ、清々しさが良く伝わってきます。
塩澤さんは「各楽器に適したマイクロホン選びを行った。あとは自身の耳と感性、技術ノウハウを活かした」と語っていますが、まさに塩澤さんの感性と技術が結集した素晴らしい作品です。

もう一つの優秀作品はポニーキャニオン川崎さんの「'Round Midnight」です。ウッドベースのソロで始まりますが、目の前で演奏しているようなリアルな音像で迫力があります。弦が指板にあたる音はリアルさを強調していますし、次の展開がどうなるのか期待します。
それに続くWoong SanのVoがまた素晴らしい音像で捉えていますので、「甘く切ない」といいますか、私が言うと変ですが、唄の表情が良く伝わってきます。
リアルなドラムのブラシワークは曲に緊張感を加え、あまいピアノはVoを引き立て曲をリードしています。
川崎さんご本人は「ALLデジタル処理で生楽器の響きをパッケージした」と語っていますが、その通りの自然な音質、リアルな音像で素晴らしい作品です。

さて、最優秀作品　ミキサーズラボ　菊地さんのマスタリングと内沼さんのミキシングによる「all of me」です。
音の良さや解像度、レンジの広さ等はもちろんの事ですが、ビッグバンドのスイングしている様が目の前に広がります。
軽やかなピアノ、明るいビブラホンのメロディー、炸裂するブラス、サックスセクションの絶妙なハーモニー、それに乗るペットボーン、Dr、Bass、Gtのカッティング、どの楽器も過不足なく収まるべき所にいて、思わず引き込まれます。
ビッグバンドを熟知した内沼さんの録音技術や感性がビッグバンドと高いレベルで融合した結果と思います。また、それを見事に生かした菊地さんのマスタリング。「いつか自分もビッグバンドを録音をしてみたい」
そんな気にさせる……。
エンジニアのモチベーションを高めてくれる素晴らしい作品です。

受賞されました皆様、そして最優秀作品を送り出したスタジオの皆様、おめでとうございます。このような素晴らしい作品をこれからもどしどし生みだしていただき、引き続き応募して頂くとともに、このような作品がパッケージ離れの状況を少しでも改善出来ることを願いまして、講評を終わらせて頂きます。

＜部門B　2chパッケージメディア（ポップス、歌謡曲等）＞

日本ミキサー協会の梅津です。
部門Bの講評を述べさせて頂きます。

日本ミキサー協会
理事長 梅津 達男

まず、応募作品数は、23作品　昨年の24作品と、ほぼ同数の応募を頂きました。

ジャンルは、ポップス、ロックが、メインですが、演歌も１作品応募頂きました。
流れとしては、いわゆる、バンドものが増えてきたように感じました。

音的には、DAWが一般化され、アナログコンソールMixと、区別が無くなってきました。

応募の際に、コメントを頂いてますが、それを見ますと、皆さん、アナログやデジタル機器のそれぞれの特徴を熟知し、それらを組み合わせて、音楽に合った音を作っているようです。

空間の作り方も、まったくリバーブをつけない音は少なくなり、自然な空間で、近い、そんな音になってＪポップスの形が出来てきたと思います。

今回の優秀賞
まずビクターエンタテインメント中山佳敬さん録音「桑田佳祐／君にサヨナラを」

は歌の他Dr、B、Per、Gt数本、SythにPet、Fl、Choそしてストリングスと、とても音数が多いんですが、厚すぎず、薄すぎず、程好く纏められています。
　それぞれの音色が素直で、好感が持てますし、曲のイメージと合っていたのが一番よいところだと思います。
　先ほど、デジタル機器に触れましたが、中山さんも、好みのA/Dを使用したいが為に、デジタルMixで済むところを、一度アナログで再生し再度デジタル化をするなど、こだわりの音作りをしています。

　もう一つの優秀賞、サインサウンド、原裕之さん録音「シド／レイン」はビジュアルバンドと言う事ですが、聞いた感じ、とてもポップで、構成も考え抜かれた作品です。
　ストリングスセクション打ち込みにしては、出来すぎと思い、先日、原さんに伺いましたら、生で録音、弦をアレンジした西平さんが、プリプロ、バンドアレンジの段階から、携わっていたそうです。

　どんな音にするか意図がハッキリしていて、楽器の位置関係が明確です。
　Mixの前に、原さんの頭の中でしっかりした設計図が、すでに出来上がっていたと思いました。

　コメントに、ドラマティックな展開とありますが、音のブレイクなどToolsを使うテクニックも光っていました。

　そして、最優秀賞の「陰陽座／蒼き独眼」キング関口台スタジオの増田晋さんの録音です。
　ヘビーメタルバンドだそうで、まず、ハードロックで何が大変か、それは、大音量です。
　大音量のギターに、普通にマイクを立てても、モニタールームの音は、大音量に感じません。
　いかに、通常のモニター、小さいモニターで、このギターは、大きい音を出していると感じさせるかは、マイクの距離や、本数、アンビの取り具合と、工夫しなければいけないのです。
　さらに、陰陽座のギターは、音が気持ちいいんです。モニターの音を上げても、刺さらない、素晴らしい音に録れています。たぶんデジタルのリミッターも駆使したと思います。
　陰陽座のキャラクターは、「妖怪ヘビメタ」だそうで、衣装も、和風で、怪しげです。歌の処理は、これを表現していると思います。
　レベルは、少々大きすぎにも思いますが、静かな、メタルは、ありえないので、たとえ、リサージュがダイヤを描こうとも、この音圧は、宝物と言う事でしょう。

　毎回、プロ録、締め切りぎりぎりで応募が寄せられます、大体応募される方が決まってきた感があります。
　まだまだ、たくさんのエンジニアの方の素晴らしい録音がありますし、「もっと気軽に応募できる」そんなプロ録にしていきたいと思っています。

来年も素晴らしい作品を聞ける事を楽しみにして講評とします。本日は、受賞者の皆様おめでとうございました。

＜部門C　サラウンドパッケージメディア＞
SACD、DVD-Audio、DVD-Video、Blu-ray Discのマルチchサラウンド

部門C　サラウンド作品につきまして講評させて頂きます。

ビクターエンタテインメント株式会社
ビクタースタジオ長 高田 英男

デジタル技術の進化により映像の世界では３次元映像が普及し始め、効果的に映像が飛び出したり、奥行き感が深い３D作品が大きな話題となっいていますが、今年度の音楽サラウンドパッケージ部門の応募作品は３作品と、大変寂しい状況でした。

現状録音スタジオにおいて、ライブ作品やアニメ系作品の多くがサラウンドミックスをしておりますが、プロ音楽録音賞には繋がっていない現実があります。

今年度はDVD-V（ドルビーデジタル）が２作品、96KHz/24bitブルーレイディスクが１作品です。

メディアの進化により、サラウンド音源もハイスペックで収録出来る環境ですが、再生環境（サラウンドモニターシステム・プレーヤー）などの普及もあり、ハードとソフトの連携が大きな課題である事、更に基本的課題としてサラウンド音楽の魅力をアーティスト・制作者へ伝え拡げていく事の重要性を改めて感じております。

今年度は応募作品が３作品でありその中で最優秀賞作品を決める事について審査員の皆様にお伺いし、最終的に運営委員として今年度は最優秀作品、該当無しとの結果となりました。

具体的な録音講評として、DVD-Vの２作品はホール録音です。１作品はオーケストラ録音、もう１作品はチェロを中心としたアコーステック録音となっています。

ホールと中継車を光伝送により音質劣化を軽減、インプットモジュールのリモートコントロールによりアナログ信号を最短にするなどの高音質に向けた工夫をしております。

音創りとして共に積極的にアンビエントを使った音場空間表現ではなく、フロント楽器のリアリティーをポイントにクリアーなホール録音であり、特にチェロ録音は生々しい楽器の質感が見事に表現されていると感じました。

今年度　部門C　優秀作品

発売	Ariola Japan Inc.
作品	「TOSHIKI KADOMATSU Citylights Dandy」より 「HOT LAZY NIGHT」
アーティスト	角松　敏生

メインエンジニア	川澄　伸一	(株)ミキサーズラボ
マスタリング・エンジニア	前田康二	バーニーグランドマンマスタリング東京
アシスタントエンジニア	石　光孝	(株)ミキサーズラボ

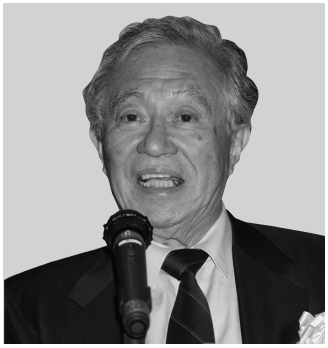
優秀賞おめでとう御座います！

第一印象として洗練されたポップスサウンド（角松サウンド）と感じました。
川澄さんコメントとして初めにステレオミックスを仕上げ、そのサウンドを基本としてサラウンドサウンドに拡げて行き、新たな作品を創作する感覚で仕上げたとの事です。
トリッキーなサラウンドサウンドでは無く、自然に音に包み込まれるサラウンドサウンドであり、間奏のアコーステックピアノでよりサラウンド効果を感じるなど、洗練されたサラウンドサウンドと感じました。又、積極的に新しいメディアを活用し高音質サラウンドの魅力を創作していく姿勢に、エンジニアとしての創作エネルギーが伝わってきます。

まとめ
昨年度の講評でもお伝え致しましたが、音楽感動を伝える手段としてサラウンド音楽は大きな可能性を持っていると感じています。更にサラウンド音楽が広がって行く事により、音楽ビジネスの力になると確信しております。
現状を踏まえますと、サラウンド部門審査を放送サラウンド作品と一緒に審査する事も検討事項となっております。
来年度プロ録運営委員として、サラウンドパッケージ部門の応募広報など検討し、サラウンドパッケージ部門を存続出来る様に努力致しますので、皆様のご協力の程お願い申し上げ、講評とさせて頂きます。

優秀賞受賞、川澄さん本当におめでとう御座いました。

＜部門D　放送メディア＞


(社)日本音楽スタジオ協会
顧問 淺見 啓明

只今、ご紹介頂きました、放送部門の審査を担当いたしました日本音楽スタジオ協会の淺見です。

今回エントリーされた作品は、例年より若干少なく10作品ということで残念でしたが、優れた作品が多く、評価も僅かの差で決定いたしております。
サラウンドの作品の音創りは、格段の進歩が観られ、10作品中７作品がサラウンド番組で、来年７月からの「地上波デジタル放送」移行に際し、地方局も活発に取り組まれている頼もしい様子が伺われました。

優秀賞を受賞された「日本放送協会」の野口康史さん他の方々が担当された作品、「どれみふぁワンダーランド」から“ジョニー・エンジェル”は、1960年代初頭のヒッ

ト曲に、新たな生命感を与える好録音でした。
　メインボーカルのプレゼンス、コーラスのハーモニーの明快な分離感と臨場感がマッチしており、スムーズな音のつながりとメロディーラインの明確化によって、古典的なヒットポップスを無理なく聴かせている点で、TV作品として巧みな仕上がりの作品でした。

　続いて、「長野朝日放送」の岩井和久さん他の方々が担当された作品、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラのブリテン作曲「戦争レクイエム」は、5.1方式を最も効果的に使った音創りの作品でした。
　こうした音場を必要とする楽曲は多くはありませんが、空間表現としてありうる音創りといえましょう。
　正面に拡がるテノール、バリトンのソロ、オーケストラとコーラス、右側面から天使を思わせる児童合唱、左側面の鐘の音などが、空間上に巧みに配分されており、「これこそ5.1サラウンドという」音響空間の必然性を感じさせている作品でした。

　最優秀賞の「テレビ朝日」の爲田あかねさん他の方々が担当された「題名のない音楽会」から坂本龍一さんのオリジナル作品「箏とオーケストラのための協奏曲」は、自然なオーケストラのイメージと箏の屈指した特殊奏法との融合が、聴きものでした。オーケストラの音色のつややかさとスケール感には、圧倒的な迫力があり、サラウンドへ発展していく素材としての説得力を感じました。
　また、17弦の箏は、それぞれの音色的特徴を保ちながら巧みなバランスで全体を緻密なものとしながらも、特殊奏法による斬新な音色がアクセントを創りだしており、微弱な音圧でありながら見事な分離感と鋭い音色で音響的な聴き所となっておりました。
　また、今回の作品は、日本プロ音楽録音賞17年の歴史で、女性のエンジニアの方が受賞された初めての作品です。
　爲田さん、おめでとうございました。

　以上で、私の講評は終わりますが、「日本プロ音楽録音賞」は、「参加することに意義がある」と思って、来年からは、もっともっと多くの作品がエントリーされることを関係者の方々に是非是非御願いいたします。
　「日本プロ音楽録音賞」は、他のコンクールと違って、エントリー料は無料といたしております。
　受賞された皆さん、おめでとうございました。

＜ベストパフォーマー賞＞

演奏家権利処理合同機構
ミュージックピープルズネスト
代表幹事　椎名 和夫

矢野顕子さん、ベストパフォーマー賞受賞おめでとうございます。さきほど内沼委員長からもご紹介ありました通り、ベストパフォーマー賞は今年で４回目になります。何でこういうことをやっていただきたいとお願いしたかと言うとですね、音楽というものを、セールスとか、どれだけ浸透したかという、ある種の数値で顕彰する制度はいくつもあるんですけれど、音楽の質とかパフォーマンスといった角度から顕彰していく制度というものはなかなか無い。また音楽というものは、アーティストの方々だけで成り立つものではなく、それを支えて演奏しているミュージシャンの存在も大きいわけですが、そういう人たちに陽が当たる機会が必ずしも多くないということもあって、そういう方々にフォーカスできるような仕組みができないものだろうか？ということを、かねてから考えておりました。一方でふと目を移してみますと、プロ音楽録音賞というものが、エンジニアという普段陽の当たらない方々に光を当てて顕彰していく制度だということがありまして、これは合体できるのではないか、ということでお話をしまして、４年前にベストパフォーマー賞を創設していただいたということでございます。

ただ、ベストパフォーマーということを選ぶにあたってはですね、ベストエンジニアを選ぶのであれば、レベルが大きいとか小さいとか、リバーブの使い方がどうであるかと、何らかの方法で数値化できる部分があるんですけれど、ベストパフォーマンスを選ぶということは、いったい何を基準にするのか、ということが非常に難しいわけですね。結局は、たくさんの曲を聴いた中で、どの曲が印象に残ったか、というところで選んでいくしかありません。そういう選び方をしているんで、審査の講評をしろと言われても講評なんかできるわけがなく、毎回エピソード的なお話をご紹介するみたいなことになっちゃうんですが、お許しください。

僕が昔ムーンライダースっていうバンドにいた時に、そのムーンライダースとしての最初の仕事が、アグネス・チャンの全国ツアーのサポートの仕事だったんですが、夜行列車で移動しながら一日３本とかっていうスケジュールをこなしていくんですね。その時に、キーボードで参加してくれていたのが矢野顕子さんで、僕らはアッコちゃんと呼んでいたんですが、ちょうど結婚されたあとでお子さんができまして、そのお子さんがお腹の中にいる状態のまま、夜行寝台列車移動のハードスケジュールを平気でこなされていた、というのがとても印象に残っています。それくらいエネルギッシュで、すごくファンキーな方なんですね。

音楽のジャンルにもまったくとらわれずに、ひたすら自分流に行くといいますか、そういう意味で、枠というのにはまらない、とても強いマインドを持った方なのではないかと思います。

今回の作品というのは、矢野顕子さんの一連の弾き語りの作品がありまして、1992年に「スーパーフォークソング」、それから1995年「ピアノナイトリー」、それから2000年に「ホームガールジャーニー」という３枚の弾き語りのアルバムがありますが、そのシリーズの４枚目という感じで企画されてきたものです。そして、今回の作品を語る上で必ず触れなくてはいけない要素として、実は吉野金次さんというエンジニアの方の存在があります。この４枚目を企画したのは2006年ということで、2006年10月

にニューヨークで録りましょうということで吉野さんとお話が決まっていたそうなんですが、そこで吉野さんが病気で倒れられまして、それからずうっとこの企画が実現しなかった。で、一度2008年ぐらいに、そろそろやりましょうというようなお話もあったらしいんですが、その時は、吉野さんが「自分が歩いてレコーディングに行けるようになるまではやりたくない」というふうにおっしゃったそうで、結局2009年になってようやく横浜の音楽堂ホールというところで実現をしたということだそうです。この作品を聞いたときに、パフォーマンスも素晴らしいんですが、この音を録られた吉野金次さんとの深い信頼関係のようなものも感じ取れて、より深みのある作品に仕上がったんではないかと思います。ぜひこのベストパフォーマー賞の主旨を、吉野さんと二人でシェアしていただけたらなあと思います。

矢野顕子さんには、これからもますます活躍していただきたいと思います。ベストパフォーマー賞、おめでとうございました。

＜アビッド賞＞

「アビッド賞」につきまして講評させて頂きます。

ビクターエンタテインメント株式会社
ビクタースタジオ長 高田 英男

アビッド賞につきましてはデジタル録音技術を如何に活かし、音楽創作への貢献が出来たかを顕彰する賞で御座います。

デジタル録音技術の進化は、現在音楽制作プロセスまでも変えており、デジタル技術対応力は音楽制作において、欠かせない現場技術となっております。

今年度受賞作品も録音審査評価が大変高く、音楽性と音創りが合致した作品が結果選定されました。

受賞作品

発売	ビクターエンタテインメント(株)
作品	「A TIME FOR LOVE」より「SWAY（QUIEN SERA)」
アーティスト	FRIED PRIDE
メインエンジニア	高桑　秋朝　ビクターエンタテインメント(株)

アビッド賞受賞本当におめでとう御座います！

作品「SWAY」のサウンド感ですが、フラメンコ独特のクラップと靴音による躍動感を核にカホン・生ギター・唄が一体となり、強いビートのドライサウンドとなっています。エンジニア・コメントとして唄と楽器バランスを第一に考え、全体サウンドが潰れる事なく且つ、粒立ちが良く迫力あるサウンドを目指しました。

音創りに対しデジタル技術の活用から一歩進んで、音楽を創作（アレンジ）する為の手段として、デジタル技術を活用しているとの事。アーティストの要請によりあくまでも演奏そのものを活かしながらPro Tools編集機能を上手く活用して行く、デジタル技術の理想的な使い方であると思います。

エンジニアがエンジニアリングに留まらない、クリエイターとしてのアプローチが作品に反映されているのではないでしょうか。

Pro Tools version 8.0で電源200V使用、プラグインは帯域コンプレッサーやディエッサーを中心に使用。
又、受賞曲ではありませんがアーティスト立会いスケジュールにより全てPro Toolsでミックスし、後日部分修正などデジタル技術でしか対応出来ない使い方もされております。

まとめ
録音技術の進化も、「使える（技術習得）」から「使って何を表現出来るか」が問われる時代になっております。
技術の引き出しは多ければ多いほど有利であると同時に、技術を使って何が提供出来るか、デジタル技術の恩恵は音楽制作におけるエンジニアの領域を広げていく大きな力を持っていると感じております。

＜SSL賞＞

「SSL賞」につきまして講評させて頂きます。

ビクターエンタテインメント株式会社
ビクタースタジオ長 高田 英男

SSL賞は今年度から新に顕彰された賞でありまして、アナログ録音技術を如何に活かし、音楽創作へ貢献出来たかを顕彰する賞で御座います。
音楽制作においてアナログ録音技術は録音の基本的技術であり、マイク選定から始まる音楽創作における根本的技術です。
録音された音源はデジタル処理され対応するにしても、基本的なアナログ録音技術がないと何も出来ない大変重要な基本技術です。

又、これらのアナログ技術は経験が重要であり今後も伝承して行く大切な技術ですので今年度から新たに顕彰される事は、大変意義深いと感じております。

受賞作品
発売　SME Records Inc.
作品　「みちくさ日和」より「愛妻日和 feat．曽我部　恵一」
アーティスト　Fairlife
メインエンジニア　三浦　瑞生　（株）ミキサーズラボ

SSL賞受賞本当におめでとう御座います！

「愛妻日和 feat」サウンド感ですがピアノ、ドラム、ベース、クラリネットからなるデキシーサウンドで、同時録音ならではの唄・演奏の一体感が表現されております。

エンジニアコメントとして、一発録音で演奏されている雰囲気・空気感も含めて表現する。
録音システムはサンプリング周波数88.2kHz/24bit録音された音源をSSLコンソールに立ち上げミックスをしております。

マイク選定・マイクアレンジ・ヘッドアンプなど、長年の経験からでしか得られない技術力により、サウンドそのものは大変素直で唄のメッセージ（言葉）が伝わってきます。
匠ならではの音色感・空気感が表現されていると感じました。

まとめ
録音技術（テクノロジー）の進化が進めば進むほど、マイク選定・マイクアレンジ・ヘッドアンプなど、何が正しいのか正解が無い音の世界では、長年の経験による感性を磨く事の大切さを、改めて認識致しました。
今後音楽創作への質を上げる為にも「原点回帰」であるアナログ的録音技術の追求と、伝承して行く大切さを考えさせられる作品でした。

「音の日のつどいパーティー」レポート

平成22年12月６日（月）「音の日」記念イベントとして、18：00より御茶ノ水・東京ガーデンパレス２F「高千穂」に於いて、当協会および（社）日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、(社）日本レコード協会、演奏家権利処理合同機構Music People's Nestの共催により、第17回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者と当日併行して開催された（社）日本オーディオ協会主催の「音の匠顕彰式」関係者が参加した「音の日のつどいパーティー」が開催された。

当日の模様を以下にレポートさせていただきます。

校條 亮治 会長

内沼 映二 会長

最初に（社）日本オーディオ協会の校條亮治会長より来場者に対して開会の辞が述べられ、続いて（社）日本音楽スタジオ協会・内沼会長により乾杯の発声が行われた。

「音の匠」受賞者

30分程経過したところで、本年度の「音の匠」として顕彰された内容が以下の通り紹介された。

「12月６日「音の日」に、活動弁士として伝統話芸を継承し、音の原点である肉声と多彩な語り口で人々に感動を与える活動をされている澤戸　翠（さわとみどり）氏を「音の匠」として顕彰しました。澤登さんは、これまで500本以上の様々なジャンルの無声映画の活動弁士として活躍されており、後進の育成にも取り組まれています。また、海外でも活躍され日本の伝統文化を世界に伝えておられます。」

「音の匠」の紹介に続き、プロ音楽録音賞授賞式の司会者「石川 みゆき」さんの進行により、第17回日本プロ音楽録音賞に於いて表彰された各部門33名の受賞者を代表して、最優秀賞に選ばれた代表エンジニア３名のインタビューが行われた。

部門Ａ「2ch パッケージメディア
（クラシック・ジャズ等）」
菊地 功 氏
（株）ミキサーズラボ

部門Ｂ「2ch パッケージメディア
（ポップス・歌謡曲等）」
増田 晋 氏
（株）キング関口台スタジオ

部門Ｄ「放送メディア」
爲田 あかね 氏
（株）テレビ朝日

代表者３名のインタビューが終了した後は再び歓談タイムとなり、会場内では受賞者を取り囲んで談笑する場面が見受けられ、今年も様々な音のプロフェッショナルな方々が一同に会する場となりました。

最後に中締めの時間となり、一般社団法人日本レコード協会 情報・技術部部長 畑　陽一郎氏の挨拶により、無事に終了となりました。

今回もプロ音楽録音賞の運営委員会および審査委員の皆様をはじめ、多くの関係者のご協力により、第17回目を無事に終了することができました。有難うございました。

一般社団法人 日本レコード協会
畑 陽一郎 氏

会　員　動　向

1．会員数（平成23年１月１日現在）

正会員（法人）	31法人	正会員（個人）	17人
賛助会員Ⅰ	40法人	賛助会員Ⅱ	３法人

2．入会

①個人正会員

○加藤　英雄　　平成22年11月１日付

②賛助会員

○SFIリーシング株式会社　　平成22年11月１日付

【協会担当者】

栗原　史彦

3．退会

①正会員

○株式会社アップアップ　　平成22年10月31日付

○株式会社ジィード　　平成22年10月31日付

○株式会社クリケットスタジオ　　平成22年11月30日付

②個人正会員

○大野　進　　平成22年９月21日付

（ご逝去のため）

②賛助会員Ⅰ

○ヒビノインターサウンド株式会社　　平成22年９月30日付

○株式会社ソニーファイナンスインターナショナル　　平成22年10月31日付

4．法人・会員代表者および住所変更、その他

①法人正会員

○法人代表者変更

株式会社サウンド・シティ

（旧）石井　喜三郎

（新）坂口　清太郎

○住所変更

株式会社クリケットスタジオ

（新）〒107－0062　港区南青山１－８－18

TEL：03－3470－7270（変更なし）

FAX：（新）03－3470－7273

○住所変更

株式会社アップアップ

（新）〒106－0031 港区西麻布１－14－14

株式会社ミキサーズラボ　ワーナーミュージック・レコーディングスタジオ内

TEL：03－5474－0911（FAX同）

○住所変更

株式会社ユーズミュージック

（新）〒107－0061 港区北青山２－７－26 フジビル28 ３F

TEL：03－6823－9300（変更無し）

FAX：（新）03－6741－4626　　平成23年10月25日付

②賛助会員

○カナレ電気株式会社

【法人代表者】

（旧）川本　公夫

（新）尾羽瀬　正夫（代表取締役社長　社長執行役員）

【協会担当者】役職変更

加藤　宣司

（旧）取締役　常務執行役員

（新）取締役　副会長

○ナショナル物産株式会社　ビデオ・グラフ事業部

【協会担当者】

（旧）小野　直之（取締役）

（新）戸野　博文（執行役員事業部長）

○オリコン・エンタテインメント株式会社

【法人代表者】

（旧）西山　靖人

（新）高橋　茂（代表取締役社長）

［営業終了］

○株式会社エス・イー・エス　山中湖スタジオ　2010年11月30日営業終了

［住所変更］

○オタリテック株式会社　2010年10月１日業務開始

（新）〒169－0051 東京都新宿区西早稲田３－30－16　HORIZON.1ビル

TEL：03－6457－6021　FAX：03－5285－5281

５．その他

○理事長変更

社団法人 日本アド・コンテンツ制作者連盟

（旧）森　俊幸

（新）野末　敏明

○専務理事変更

一般社団法人 日本レコード協会

（旧）生野　秀年（退任）

（新）水村　雅博（昇任）

○会長・理事長変更

特定ラジオマイク利用者連盟

（会長）　八幡　泰彦

（理事長）田中　章夫

○会長変更

社団法人 映像文化製作者連盟

（旧）八木　信忠

（新）塚田　芳夫

○センター長変更（役職名変更→専任局長）

日本放送協会 制作技術センター

（旧）熊田　典明

（新）毛塚　高栄（専任局長）

○会長変更

一般社団法人 日本音楽出版社協会

（旧）朝妻　一郎

（新）谷口　　元（エイベックス・ミュージック・パブリッシング株式会社）
○会長変更
社団法人 日本映画テレビ技術協会
（旧）古森　重隆
（新）早河　　洋（(株)テレビ朝日　代表取締役社長）
○営業終了
株式会社EMIミュージック・ジャパン・スタジオ（2010年６月30日）
2010年７月１日以降
株式会社EMIミュージック･ジャパンにてマスタリング事業･エンコード事業･コンテンツ事業を継続
株式会社EMIミュージック・ジャパン
管理本部 サプライチェーン部 マスタリング・エンコーディング・グループ
〒107－6327　港区赤坂５－３－１ 赤坂Bizタワー27F
TEL：03－6830－8337（マスタリング）
〒107－0052　港区赤坂６－９－17 赤坂ロイヤルオフィスビル４F
TEL：03－6229－8720（エンコード、コンテンツ）
○住所変更
社団法人 日本ポストプロダクション協会
〒160－0014　東京都新宿区内藤町１番地　内藤町三洋ビル７階
TEL：03－3355－6420　FAX：03－3355－6421
＊TEL・FAX番号の変更はありません。
○移行
（旧）社団法人 映像文化製作者連盟
（新）公益社団法人　映像文化製作者連盟（平成22年８月20日より）
○会長変更
一般社団法人 日本音楽著作権協会
（旧）船村　徹（名誉会長）
（新）都倉　俊一
○移行
（旧）社団法人 音楽出版社協会
（新）一般社団法人 日本音楽出版社協会（平成22年10月１日より）
○法人格取得
（旧）日本作編曲家協会（JCAA）
（新）一般社団法人 日本作編曲家協会（JCAA）
○会長変更
日本フイルムラボ協会
（新）星　正人（株式会社 IMAGICA）

♪　編　集　後　記　♪

2011年明けましておめでとうございます。今年こそ世の中のリパックに対応、頭の中もセットアップチェンジしようと思います。どうか本年が良い年であったと言えるような年になりますように…

うさぎ

昨年は、酒とラーメンと焼肉が大好きだった大野 進相談役が残念ながら他界されましたが、今年は不安定な政治・経済の状況にもめげること無く、気合いをこめて乗り切りましょう。

hair ken short

明けましておめでとうございます。１年の月日の早さが歳をとるたび感じます。今年はどんな１年になりますやら。本年もよろしくお願いいたします。

yakiton

新しい年を迎えるたびに小さな目標を立てるのですが、いつの間にかあやふやに…。今年こそは！

mm

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 運　営　委　員　会 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

委 員 長　広岡　淳利（音響ハウス）
委　　員　佐藤　賢一（事務局）
〃　　山本　　薫（　〃　）
〃　　伊東　真奈美（　〃　）

＊＊＊

【発行人】 会　長　内　沼　　映　二　　【発　行】 2011年（平成23年）１月
【発行所】 社団法人 日本音楽スタジオ協会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目1番11号　モナーク大久保３F
TEL. 03－3200－3650　　FAX. 03－3200－3660
http://www.japrs.or.jp　　E-mail:japrs@japrs.or.jp
【編　集】 運　営　委　員　会　　【印刷所】 株式会社研恒社

JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios
http://www.japrs.or.jp E-mail:japrs@japrs.or.jp